

鴨川府民会議メンバーからの意見発表

事前に資料を提出いただいた方

(敬称略、五十音順)

川嶋 瑛莉

舟津 麻子

松井 成樹

氏名	川嶋 瑛莉												
テーマ	感覚環境を使ったまちづくりの提案 ～鴨川を魅力的にするために～												
意見	<p>■ 感覚環境を使ったまちづくりの提案</p> <p>感覚環境は、その時折によって変化し、その時でしか味わえない空間を演出します。更に、人は光や音、かおり、風などをキッカケとし、思い出の創出がなされます。よって、人は感覚という環境を用いて、季節や時代が移り変わっても、何らかの感覚によるキッカケでその時折の風景を思い出すのです。 ⇒まちや河川の風景への愛着に◎</p> <table border="1"> <tr> <td colspan="2">五感で楽しむまち</td> </tr> <tr> <td>見る</td> <td>眼で感じることの出来る、光の輝きを活かしたまちづくり</td> </tr> <tr> <td>味わう</td> <td>地元の特徴を、万人を感動させる味覚を活かしたまちづくり</td> </tr> <tr> <td>肌で感じる</td> <td>人が肌で感じる“気持ちいい”感覚を活かしたまちづくり</td> </tr> <tr> <td>嗅ぐ</td> <td>自然の香り、地元を象徴する香りなどを活かしたまちづくり</td> </tr> <tr> <td>聴く</td> <td>身近な生活に根付く音を活かすようなまちづくり</td> </tr> </table> <p>出典：環境省 大気環境・自転車対策 感覚環境のまちづくり 五感で楽しむまち大賞 参照(2014年1月8日閲覧)</p> <p>■ 提案の背景</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鴨川ふれあい空間のような取り組み ・芸能文化 <p>日本の伝統芸能の歌舞伎は、京都が発祥といわれています。そのいわれは、江戸時代に遡り、1603年、出雲阿国が四条河原で歌舞伎踊りを始めたことで大變評判となり、たちまち大流行しました。そして、四条や五条河原で小屋を作り、盛んになったとされています。</p> <p>■ 提案</p> <p>1. 音を奏でる鴨川の提案</p> <p>京都の鴨川において感覚を研ぎ澄ませてみると、様々な音が聞こえてきます。鳥のせせらぎや川の流れる音、魚が跳ねる水しぶき、行き交う人々の話し声など様々です。さらに、周辺で行われる行事を取り上げてみると、祇園祭や時代祭などがあり、時期になると、太鼓の音や、囃しの音などが聞こえてきます。これらが、鴨川で感じられる「音」なのです。</p>	五感で楽しむまち		見る	眼で感じることの出来る、光の輝きを活かしたまちづくり	味わう	地元の特徴を、万人を感動させる味覚を活かしたまちづくり	肌で感じる	人が肌で感じる“気持ちいい”感覚を活かしたまちづくり	嗅ぐ	自然の香り、地元を象徴する香りなどを活かしたまちづくり	聴く	身近な生活に根付く音を活かすようなまちづくり
五感で楽しむまち													
見る	眼で感じることの出来る、光の輝きを活かしたまちづくり												
味わう	地元の特徴を、万人を感動させる味覚を活かしたまちづくり												
肌で感じる	人が肌で感じる“気持ちいい”感覚を活かしたまちづくり												
嗅ぐ	自然の香り、地元を象徴する香りなどを活かしたまちづくり												
聴く	身近な生活に根付く音を活かすようなまちづくり												

(1) 音楽の鳴るベンチ

第一の仕掛けは、音楽の鳴るベンチである。音には、聞こえる範囲と聞こえなくなる範囲がある。その仕組みを利用し、ベンチに座っている人だけが聞ける範囲で音楽を流す。

音楽を聴く仕組みは次のとおりである。ベンチにスイッチを備え付け、スイッチを押すと音楽が鳴るようにするのである。流される音楽はいくつかを用意し、ランダムに鳴るようにする。

流す曲の提案としては、四季に見合った日本の童謡や唱歌とする。例えば、春は「春の小川」「さくら」、夏は「海」「茶摘み」「夕焼け小焼け」、秋は「どんぐりころころ」「もみじ」冬は「ゆきやこんこん」「たき火」などである。このような歌は、誰もが一度は耳にしたことのあるものであり、懐かしい気持ちを再び感じさせる事ができる。日本に由来した音楽をまちの中に取り入れることにより、音楽が記憶とともに結び付き、更なるまちの愛着心に繋がると考える。

(2) 鳴らす壁

第二の仕掛けは、「鳴らす壁」である。わたしたちの身の回りには、気付かないだけで音が鳴るものが多く存在している。そこで、感性を高める場を遊びの空間として、京都の鴨川に提案していきたい。

橋の下などを利用し、音のなる壁を創る。そのために、木琴のように長さの違う板を壁側に備え付ける必要がある。ただ単に付けるのではなく、アートのようにして付けることが出来れば、見ても楽しく、奏でも楽しい、まさに感覚に訴えかける場の提案が実現できる。そうすることによって、自然の音と調和をし、自らが音楽を奏で、人々の感性をより高めていくことが出来る。

2.日替わり模様ライトの提案

照明制御システムの仕組みを元にして、更なる歩いて楽しい道づくりとして、日替わりのライティングを用いた演出で賑わいを作ることが出来ると思う。そこで、街灯に照明制御システムを搭載したプロジェクターなどを設置し、人が通るのをセンサーで察知し、道に模様を映し出す提案をする。そのことによって、歩いて楽しい道づくりの期待ができる。道しるべとしてのあかりの考え方は、道の全体を全体的に照らす必要性はない。ランダムな模様を映し出すライティングであっても、本来の道を歩くという目的の考え方を害さないからである。

3.鴨川ふれあい空間について

芸能文化の発祥地と言われる京都の鴨川の歴史に、新しい意味を付随させることによって、更に魅力的な鴨川の提案が期待できる。それはすなわち、既存の文化を大切にし、新たな価値の創出をすることが目的とする方法だからである。

(1) ねらい

- ・若い人たちの表現の場として提供することにより、新しい京都や鴨川の魅力として発信に繋がる。
- ・府の役員や周辺住民、河川敷を利用する人たちが互いに互いを知る仕組みの創出。

(2) 内容案

- ・音楽、パフォーマンス

基本的には、出演者は京都の学生、及び京都に縁のあるアーティストを対象とする。鴨川にまつわるテーマソングを用意し、エンディングにはみんなで合唱をする。

- ・灯籠の展示や灯籠づくりのワークショップ、フォトコンテスト、ポエムコンテスト、プロジェクションマッピング Etc...

(3) 場所の案

- ・三条大橋の河川敷

アーティストや若者が多く集う場所であるからである。また、前例としては、京の七夕などの開催地であるからである。また、季節なども考慮すれば、床を利用する人にもアプローチをかけることが可能である。この場所は、比較的交通量が多く、人目につきやすい場所である。よって、催しを実施しても、費用対効果が期待できると考えられる。

- ・出町柳にある三角州周辺

この場所は、京阪電車の最終地点であり、交通網は便利である。周辺には、同志社大学や、活気の溢れている榊形商店街や、お洒落なお店等がある。また、京都大学や同志社大学にも比較的近い場所にあり魅力的である。

更に、出町柳の三角州において行われた公共のイベントというのは、実はまだ実施前例がないようである。ただし、パフォーマーやサークルなどが個人的に行うイベント等は自己判断によって実施されているケースがある。

■私の願い

私たちの生活は、豊かな社会になっていくことに連れて、自然と調和し、五感で体験できる場が少なくなっていると考えられました。

そして、環境問題である。感覚に心を研ぎ澄ませば、環境が私たちに訴えかけている声が聞こえたのではないだろうか。私たちは、便利な暮らしをすることの代償に、感覚の声を聴いてものごとを捉えるということが出来なくなっていったのかもしれない。だからこそ、今、感覚の声を聴く力を高めていくべきなのです。よって、感覚環境という視点からまちづくりを開拓していくことが求められます。この現状から、「感覚環境」という考え方をを用いて、自然の中で人々が感覚により感性を育み、自然と調和する社会を目指していくべきと思っています。

鴨川府民会議において公募議員を務めさせていただいたことにより、鴨川のことをより知るチャンスとなりました。きれいで魅力的な鴨川を維持し、存続させていくためには、より多くの人がこの場所を愛し、気付くキッカケを創り、動いていく必要があるのではないかと考えます。そのキッカケのひとつとして、私は、以上のように、鴨川の魅力より沢山の人に知ってもらえるキッカケを創出していくことが大切であると考えます。私は、鴨川の魅力を再発進していくプロセスとして、感覚環境という切り口で考えることにより、新しい発想が生まれることに期待します。

氏名	舟津麻子
テーマ	行政と府民、双方の視点から「日常」を可視化する
意見	<p>私は大学進学とともに京都で1人暮らしを始め、京都歴はまだ4年ほど。鴨川を初めて訪れた時、河川敷に座ってお喋りする人や、母親に必死に着いていこうとするカモの子ども達、夜になれば各々の“自慢”を披露する人とそれを物珍しそうに見物する人がいて、今となっては当たり前と感じてしまう鴨川の日常の風景を目の当たりにし、これからの京都での学生生活をとても楽しみに思ったことを覚えています。</p> <p>その一方で、この鴨川府民会議に出席させて頂いてから知った、鴨川が抱える課題の多さに、それを「日常」として見て見ぬふりはできないと初めて気づくことができました。生態系に関わる問題や環境問題など、すぐには解決できない難解な問題も多くありますが、そういった情報は提供されない限り府民にはなかなか伝わりにくいものです。知らなければ府民も協力しようがありません。時々京都府から届く広報誌がありますが、それに真剣に目を通す人は、特に若者の中でごく少数ではないでしょうか。</p> <p>そこで、「日常」として当たり前に思っている鴨川の魅力と課題について、行政と府民の双方がまず“気づく”ことが必要であると思います。例えば〈新米・河川課職員カワハシくんの気になるメモ〉と題し、SNSを活用して若者でも入手しやすいカタチで情報を提供することも一案だと考えます。写真を用いて、位置情報も加えることによって鴨川の魅力と課題の可視化・地図化にもなります。ただ、よくSNSを利用すれば自然と双方のコミュニケーションになっていると勘違いしているアカウントも見受けられるため、これは広報誌であっても同様に言えることですが、情報の押し付けではなく“共有”のための媒体であることを大事にしてほしいと思います。情報を開示したから後はそれを理解しようとしないうちに問題がある、では共有したことになりません。例えば〈メモ〉にリプライ（返事）を送ってくれた方に、〈カワハシくん〉（行政）のもつ知識・情報を付与することで、一つの“気づき”は新たな疑問や発見、共感に繋げることができます。また、そういったコミュニケーションをしていく中で、内部だけで議論しては見えてこなかった貴重な外の声にも気づくことができます。内部にとって都合のいい意見によって独走することなく、双方の視点から鴨川のあるべき姿はつくられていかなければならないと思います。お互いに“知りたい欲”をかき立てられる面白くて役に立つ情報交換の場、そしてまた府民自身がその情報を“伝えたい欲”として府内のみならず府外の人々にも伝えていこうとする意識と自覚の芽生えに期待したいです。</p>

いずれは、観光庁で実施された訪日促進 SNS キャンペーン「Share your WOW!-Japan Photo Contest-」の例を参考に、〈知ってた？カワハシくん！鴨川スクープ写真コンテスト〉など、府民や観光客の目線での“気づき”を発信できるサイトも運営できれば、鴨川を共に考え大事にする意識が、行政やこの鴨川府民会議におさまってしまうことなく広がっていくキッカケになるのではないかと思います。規制を増やすのは簡単で尚且つあまり意味がありません。そうではなくて、鴨川を大事に思う気持ちを育てていく活動にも力を入れていってほしいと思います。まだまだ知らないことがたくさんある鴨川。鴨川を訪れる人みんなにとって大事にされる空間に、これからもあってほしいです。

氏名	松井成樹
テーマ	鴨川について思うこと
意見	<p>一 鴨川府民会議参加の目的</p> <p>昨年より鴨川府民会議に参加させて頂いておりました。まず、府民会議に参加させて頂いた動機をお話させて頂きたいと思います。</p> <p>私は鴨川から50メートルほど東に入った川端一条東入で生まれ、育ちました。幼いころから遊び場は鴨川で、メダカを採ったり、ザリガニを見つけては喜んでいました。最近では娘を連れて鴨川に遊びに行くことも多く、昔を懐かしんでおります。</p> <p>幼いころ、祖母から昔の鴨川の話をお聞きしていました。大正昭和の初期には鴨川には虫が多く生息し、鴨川から少し離れた蔵の方にまで飛んできて、それは美しい光景だったようです。私の夢は、鴨川に虫が戻り、その光景が初夏の風物詩として京都に根付くことです。</p> <p>二 鴨川の活用</p> <p>悠久の古都を流れる鴨川は未来に渡るまでその姿を保たなければならないという意識は府民会議メンバー全員の総意だと思います。鴨川に虫が戻るためには環境整備は欠かせません。環境保全のために最短距離を歩もうとするのならば、人の立ち入りを禁止することが最も効果的なのかもしれません。ただ、京都は環境都市であると同時に観光都市でもあります。環境施策と観光施策は時として対立する場面があるようにも思います。しかし、両立させることはできるはずで。</p> <p>この府民会議では環境、景観対策に重きを置いた議論が中心だったように思います。私もこの方針には賛成をしますが、我が国有数の観光地として、様々な工夫をする必要があります。また、そこで行われる経済活動にも目を向けたいと思います。</p> <p>1 橋の下の有効活用</p> <p>例えば、橋の下のスペースを利用したカフェや、夜間営業のBARなどは鴨川の持つ魅力を一層増し、価値を高めるものになると信じています。</p> <p>時間や場所、季節を限定することでいくつかの問題はクリアできるでしょう。</p> <p>出店料やそこでの売り上げの一部は税金となり、そこから鴨川の整備費用を捻出します。環境対策はボランティアだけの仕事として捉えるのではなく、企業の経済活動を巻き込むことによって持続可能になります。</p> <p>2 プロジェクションマッピング</p> <p>プロジェクションマッピングが議題に上がった際、会議では反対意見が</p>

多数派だったように記憶しています。これも一晩中やるのではなく、時間、場所、季節を区切ることで、鴨川の生態系に最大限配慮すれば実現可能なのではないでしょうか。

3 石燈籠

鴨川は付近の住民にとっては災害時の避難場所にもなっています。大地震の際には多くの人々が鴨川河川敷に避難してこられることが予想されますが、夜の鴨川は明かりが少なく、ほとんど先が見えません。景観や環境を破壊することの無いよう、一定の間隔で石燈籠を設置することは災害時に有用であると思います。

三 その他雑感

四季の日を根付かせるためにはその年度によって日程が変わるようでは周知することなど到底できません。また、パネルを府庁内に飾る、橋の下にパネルを設置するということは恐らく、予算に見合う成果は得られないのではないかと思います。税金を使うのであれば、目的に対して最大効果をえられるよう、検討を重ねる必要があると感じました。

四 最後に

府民会議を通じて様々な考え方を勉強させて頂きました。そのほとんどは私にも共感でき、推進していかないといけない課題であったように思います。こうした中で私が申し上げたいのは、環境保全と経済活動は両立が可能であるということです。美しい鴨川を後世に伝えるためには環境・景観の保全を基礎に、鴨川の魅力を高め、人々の関心を集めることが大切です。鴨川に関心が向かえば、環境保護の機運は高まります。京都は古き良き伝統が息づくと共に進取の気風を纏う街です。知恵を絞れば良いアイデアが生まれるでしょう。そのためには、様々な企業力を借りて、持続可能な環境保全運動を実現すべきであると私は考えています。鴨川を想う気持ちは企業も個人も同じです。京都で活躍する様々な企業とボランティアの方々の協力の下、いつの日か、世界中の人々が集う鴨川で多くの蛍が舞う日を楽しみにしています。

以上